

国語科における「深い学び」を生み出す絵本の活用の可能性
—『スイミー』と『フレデリック』との関連付けを通して—

キーワード：絵本、同一作者、深い学び、思考方法

千里金蘭大学 細 恵子

1、はじめに

『小学校学習指導要領（平成 29 年告示）解説総則編』では、今後の大きな質的な変化をする時代に向け、自らの生き方やよりよい社会を創造していくために必要な資質・能力の育成を求めており、それらを育むために「主体的な学び」、「対話的な学び」、「深い学び」の視点で授業改善を進めることが重要であるとされている。

小学校では、これまでも児童が課題を意識し進んで学習に取り組める活動やテーマに沿ってグループや学級で話し合う活動を取り入れるよう努めてきた。しかし、これらの活動を設定しても、「深い学び」がなければ活動することが目的化してしまい、児童自身が学びを実感することや次の学習への意欲と具体的な目標をもつことができないという課題が残る。

小学校国語科の教科書教材「スイミー」の教材文の後に掲載される「てびき」の最後には、初めて同一作者（レオ・レオニ）の絵本を読むことが設定されているが、「レオ=レオニさんのお話と絵を楽しみましょう」（光村図書第 2 学年）、「スイミーをかいた人のほかのおはなしもよんでみましょう」（東京書籍第 1 学年）、「本とともにだち」（学校図書第 2 学年）と書かれているだけで、どのような読み方をするかについては例示されていない。これまでに教材文と同一作者の本を扱った小学校の授業実践では、それらを比較することで人物像や人物の変容、出来事、主題等について深く読む力を目指す実践（青山：2008、川上：2009）、好きな本について紹介する言語活動を図画工作科と関連させる実践（細川：2014）、人物や出来事を比較しながら関係性を交流する言語活動を行う実践（二瓶：2016）等が見られる。しかし、田村（2018）が小学校・中学校での複数教科の実践事例で示した「深い学びにアプローチする子供の姿」や「深い学びを具現化する授業デザイン」のように、教科書教材でどのようなことがで

きれば「深い学び」になるのか、教科書教材と他の本を比較する際には、どのような方法で何ができれば「深い学び」になるのか、国語科で身に付けた力を次にどのような場面で生かすことができれば「深い学び」になるのかについて児童の姿で具体的に考察されたものは少ない。

子どもたちが「深い学び」を実現し、それを実感するためには、まず教師が、子どもの「深い学び」の姿を具体的にイメージし、教材研究の力を高めることが不可欠である。つまり、用いる教材や発問、読み方、身に付けさせたい力を吟味しておく必要がある。そして、丁寧に子どもの学びを見取っていかなければならない。今、授業改善に求められることは、特に「深い学び」を生み出すための具体的な指導方法であると考える。

本研究の目的は、小学校第 2 学年国語科単元「スイミー」における「深い学び」を生み出すための教材研究を通して、絵本の位置付け方と思考方法、発問、身につく力の可能性を示すことである。

2 求められる「深い学び」

（1）「深い学び」の意味

山本（2017）は、「深い学び」を「正解のない課題に立ち向かい、これまで学んだ知識や体験、ツール等を結び付けて活用し、自分なりの解答を創り出していくような「学び」」（p.12）、「単に「使える」だけではなく、その奥の原理や、それをどのように使ったらいいのかという方法のマスターにまで達するようになる学び」（p.16）と述べている。また、その学びのためには、「学習した知識が、すでにもっている知識や自分の体験、社会的な知識と結び付いて、構造化される必要があります。」（p.16）と述べている。

奈須（2017）は、「子どもがもっている知識や経験と、今日学んでいることの間に関連が見えるという話です。」、「深い学びというのはいろいろな意

味で知識が関連づいてネットワーク化するとか、構造化するとかいうこと」(p.10)と述べている。

田村(2018)は、「深い学び」とは「知識・技能」が関連付いて構造化されたり身体化されたりして高度化し、駆動する状態に向かうこと」(p.64)とまとめている。

以上の捉え方の共通のキーワードは、知識の結び付き、関連付け、構造化である。山本の「方法のマスター」、奈須の「意欲的」、田村の「高度化」「駆動する状態」という言葉からは、未知の課題や他の教科等における課題でも、それまでに習得したどの知識や技能をどのように結び付ければよいかを考え、進んで活用して解決をしたり、さらに知識を生活場面と結び付けて自分の生き方をよりよいものにしていくことが重要であることが分かる。

さらに、田村(2018)は、構造化を知識がつながっていくこととし、①知識や技能が相互につながり、概念を形成していくタイプ、②知識や技能を他の場面、未知の状況につなげていくタイプ、③知識や技能を自分の生き方や社会につなげていくタイプに分類し、①②③のそれぞれが、学習指導要領で求められる資質・能力「知識・技能」、「思考力・判断力・表現力等」、「学びに向かう力・人間性等」に結び付くと説明している。

『小学校学習指導要領解説国語編』(以下『解説国語編』と示す)では、第1学年及び第2学年の「知識・技能」で求められていることは、「共通、相違、事柄の順序など情報と情報との関係について理解すること」である。文学的な文章を読むことにおける「思考力・判断力・表現力等」では、「場面の様子や登場人物の行動を具体的に想像すること」、「文章の内容と自分の体験とを結び付けて感想をもつこと」等が挙げられている。これらの内容については説明もされているが、「深い学び」の意味を具体的に捉えることはできない。「学びに向かう力・人間性等」の育成については明記されていない。

筆者は、国語科の「読むこと」における「深い学び」を生み出すために以下のことが必要だと考える。

- ・「知識・技能」の育成では、情報と情報との関係を具体化する。
- ・「思考力・判断力・表現力等」の育成では、他の本や他教科等との関連付け方を明確にする。
- ・「学びに向かう力、人間性等」については、日常生活との関連付け方を明確にする。

(2) 国語科での関連付けによる深い学び

勝見(2014)は、一つの文章を読み深める授業では、思考力を鍛える活動を含めることが重要だと捉え、テキストの内側を関係付ける読みとして、「部分と部分とを関係付けて読む」、「部分と文章全体とを関係付けて読む」、「部分と題名とを関係付けて読む」を挙げている。これらは情報と情報との関係付けを具体化したものと考えられる。指導者は、児童が他の場面でも活用できる関連付けの方法をまず一つの教材で意識して習得させる必要がある。

また、勝見は、今後、テキストの外側を関係付ける読みも求められるとし、「文章と他の文章とを関係付けて読む」、「文章と自分の経験・生き方とを関係付けて読む」等を挙げている。

「文章と他の文章とを関係付けて読む」では、教科書に関連した絵本、本、他の教科書会社の教材等を活用することになる。これまでの筆者の実践から、この読み方には2通りあると考える。

一つ目は、比べ読みである。細(2016)では、友達関係をテーマにした教科書教材と絵本との比べ読みを取り入れ、児童に共通点と相違点を見付けさせることで、人物像を多面的に読むことや人物の行動を批評することなどが可能になったことを示した。このことから、複数の絵本の比べ読みは「深い学び」を生み出すために有効な方法の一つであると考えられる。比べ読みを取り入れる場合、複数の観点に沿って比較する方法を理解することが知識・技能の習得になる。そして、自分で観点を選び、他の絵本等で比較することを繰り返すことで思考力が身につけていくと考える。

二つ目は、教科書教材で複数の関連付け方を習得した後、他の絵本を読む時にも活用する読み方である。これは未知の課題を解決することとなり、思考力・判断力・表現力を身に付けることが期待できる。「文章と自分の経験・生き方と関係付けて読む」は、「自分も似たことがあって」「自分と似ているところは、違うところは」「もし自分だったら」など考えながら読み、人物に対して感想をもつことや、人物を通して自分を見つめることである。この関連付けの方法は、他の絵本を読む時にも活用され、人間性の育成につながると考える。

本研究では、小学校国語科で絵本を活用する場合の関連付け方として次のことに焦点を当て、具体化していく。

- ① 1冊の絵本を関連付けて読む。
- ② 2冊の絵本を観点に沿って比べ読みする。
- ③ 1冊目の絵本で習得した技能（読み方）を活用して他の教材を読む。
自分と関連付けて読むことは、③に含める。

(3) 「深い学び」を生み出す思考方法

関連付けて読む学習をするためには、どのような思考を働かせればよいのかを具体化しておくことが重要である。

『小学校学習指導要領（平成29年告示）解説総合的な学習の時間編』（以下、『解説総合的な学習の時間編』とする）では、「教科等横断的な「考えるための技法」について、探究的な過程の中で学び、実際に活用することも大切である」（p.83）と述べられ、「考えるための技法」が以下のように例示されている（pp.84-85）。

○順序付ける

- ・複数の対象について、ある視点や条件に沿って対象を並び替える。

○比較する

- ・複数の対象について、ある視点から共通点や相違点を明らかにする。

○分類する

- ・複数の対象について、ある視点から共通点のあるもの同士をまとめる。

○関連付ける

- ・複数の対象がどのような関係にあるかを見付ける。
- ・ある対象に関係するものを見付けて増やしていく。

○多面的に見る・多角的に見る

- ・対象のもつ複数の性質に着目したり、対象を異なる複数の角度から捉えたりする。

○理由付ける（原因や根拠を見付ける）

- ・対象の理由や原因、根拠を見付けたり予想したりする。

○見通す（結果を予想する）

- ・見通しを立てる。物事の結果を予想する。

○具体化する（個別化する、分解する）

- ・対象に関する上位概念・規則に当てはまる具体例を挙げたり、対象を構成する下位概念や要素に分けたりする。

○抽象化する（一般化する、統合する）

- ・対象に関する上位概念や法則を挙げたり、複数の対象を一つにまとめたりする。

○構造化する

- ・考えを構造的（網構造、層構造など）に整理する。

これらの「考えるための技法」は、低学年の国語科の読む学習においても、発問を工夫することで活用が可能になると考える。

3 教材としての絵本

(1) レオ＝レオニの作品の意義

前述のように、「スイミー」の単元では、初めて同一作者（レオ＝レオニ）の絵本を扱うように設定されている。そこで、教科書教材と同一作者の絵本との関連付け方の導入として絵本の活用の可能性を考察する。低学年の指導がその後の指導に大きく影響すると考えるからである。レオ＝レオニの作品の意義を次のように捉える。

- ① レオ＝レオニ（1976）は、「頭の大きな子どもを描きたくないのです。ネズミやぼとっと落した色と自分を重ねあわせて考えるほうが、特定の人物と重ねあわせるよりも簡単です。（中略）ネズミなら、子どもはたちまち想像の世界にとびこんでいきますから、その不思議の世界で、あらゆる事が可能になってしまうのです。」と述べている（pp.50-51）。レオ＝レオニの多くの作品の登場人物は小動物であり、子どもたちが自分たちの生活と重ねながら具体的に想像することが可能であると考える。

- ② レオ＝レオニ（1976）が「私にとっては、己れとは何者かを知ることが、もっとも根本的な問題です。」（p.45）と述べるように、作品の多くが個の自立や自己認識を描いており、道徳科で求められている個性の伸長に関わる指導につなげることもできると考える。この指導は学習指導要領で求められている人間性の涵養に結び付くと考えられる。

- ③ レオ＝レオニの作品は大自然やねずみを扱ったものが多く、読み広げて共通点や相違点を見付ける楽しみがあり、日常の読書生活につなげていくことが期待できる。

(2) 絵本『スイミー』と『フレデリック』の内容

① 『スイミー』

赤い魚の集団の中で一匹だけ真っ黒なスイミーは、まぐろが仲間の魚を襲った後、独りぼっちになる。しかし、様々な生き物たちに出会うことにより、

生きる力を得て、新しい仲間と共に大きな魚を作り、黒い自分を生かして魚の目になり、大きな魚を追い出す。苦しい状況乗り越えてリーダーとして成長し、海を平和な世界に変えていく物語である。

②『フレデリック』

冬を前にして小さなのねずみたちは食べ物を蓄えるため一生懸命働くが、フレデリックだけは、じつと頭の中に光と色、言葉を集めている。寒い冬が来て食べ物が無くなってきた時、フレデリックは自分が集めたものをのねずみたちに伝え、みんなを元気づけ、集めた言葉から作られた詩がみんなから称賛される。小さな芸術家であるフレデリックがのねずみたちを想像豊かな世界に導く物語である。

(3) 絵本を用いて学習する意義

本研究では、教科書教材の原典である絵本の訳本『スイミー』と『フレデリック』を取り上げ、教材研究を行う。次に、先行研究を基に絵本を用いる意義を述べる。

①中心人物の進行方向とページをめくる向き

滝浪(2010)は、教科書の問題点の一つとして、挿絵の反転を挙げており、横書きの絵本が多い中、デジタル教科書において絵本を扱い、反転の問題を解決することを提案している。絵本では、登場人物の進行方向に沿ってページをめくることで登場人物の動きを連続したものとして読むことができる。

②「・・・」の表記

滝浪(2010)は、スイミーがそれぞれの生き物に出会う場面で教科書の文末に句点がつけられていることに対して、絵本の文末は「・・・」となっており、「余韻の効果をねらったもの」と捉えている(p.39)。「・・・」は、心の中の思いを想像させる働きがあり、間を取って次のページに進むことができる。

③ 絵の描かれ方

独りぼっちになったスイミーの寂しさを表した絵は3社の教科書のうち2社で省略されている。それに対して、滝浪(2010)は、その絵は、「スイミーの気持ちを推し量る上で重要な挿絵」(p.40)であるとしている。

また、生き物の絵の多くも教科書の紙面の関係でカットされている。レオ・レオニ(1976)が「苦しんだが故に、スイミーはじよじよに人生の美しさに気がつくようになります。このところは私にとって

は、とても重要なことなのです。」(p.45)と述べているように、教科書で削除された場面の絵は、その後のスイミーの変容・成長の読み取りにとって不可欠なものであると考える。

他の見方としては、木村(2009)の「絵本の中心部分であるスイミーの回復過程が短縮されると、物語の初めと終わりの部分が接近し、まぐろに襲われたスイミーが小魚と共にまぐろを追い払うという克服ストーリーに変質しやすくなる。」(p.130)を挙げることができる。この見方によると、絵本では、大きな魚を追い出したのは結果であり、海の中をみんなで楽しみながら泳ぎたいという思いの強さから大きな魚を作ったことが強調される。

4 絵本『スイミー』と『フレデリック』の教材研究

前述した思考方法を使って2冊の絵本の内容面と表現面について言葉や文、絵に着目して教材研究を行う。そして、教材研究を通して、「スイミー」の單元における絵本の位置付けと思考方法、発問、児童に身に付く力の可能性を示す。

(1) 比較する方法

まず、『スイミー』と『フレデリック』との比べ読みについて考える。

『スイミー』と『フレデリック』とを比べる際には、①人物の様子、②人物の気持ちの変化、③最初の場面と最後の場面の違い、④人物の役割、⑤詩的表現、⑥絵の表現を比較の観点として共通点を見付ける。細(2016)の実践から、これらの観点による比較は第2学年の児童にも可能だと考える。

① 人物の様子の比較

『スイミー』では、「みんなあかいは、一ぴきだけはからすがいよりもまっくろ」、『フレデリック』では、「みんな、ひるもよるもはたらいた。ただーフレデリックだけはべつ。」と書かれている。これらの表現の共通点は、スイミーとフレデリックが他の仲間と比べて一匹だけ異なる存在だということである。これらの表現からはマイナスイメージをもつことになるが、その後、『スイミー』では、「でもおよぐのはだれよりもはやかった。」と書かれ、『フレデリック』では、他の登場人物が、「おどろいたなあ、フレデリック。きみってしじんじゃなか！」と言うので、どちらの人物も価値ある存在で

あることが読み取られ、プラスのイメージに変化する。このように絵本と絵本とを比較し、共通点を見付けるといふ思考方法により、それぞれの絵本での読み取りが結びつき、「他の集団とは体の様子や行動の仕方が異なるが素晴らしい特性をもっている」という概念的、高次の読みができる。

② 人物の気持ちの変化の比較

スイミーは、大きなまぐろに仲間たちが飲み込まれた時、一匹だけになってしまい、辛い思いを味わう。しかし、様々な生き物たちに出会うことにより、生きるエネルギーを得て、新しい仲間を見つけた時、「でてこいよ、みんなであそぼう。おもしろいものがいっぱいだよ！」と声をかけ、恐れる仲間たちに「だけど、いつまでもそこにじっとしてるわけにはいかないよ。なんとかかんがえなくちゃ。」と勇気づける。スイミーの気持ちは、生き物たちとの出会いにより大きく変化した。さらに、仲間とともに大きな魚を作ることや自分が目になることを考え、教えるまでになった。一方、フレデリックは、他ののねずみたちが冬の準備をしている間、ずっと光と色と言葉を集めるという別行動をしていたが、冬の厳しさを迎えた時、のねずみたちにそれらを披露し、認められ、最後に「あかくなっておじぎをした。そして、はずかしそうにいったのだ。「そういうわけさ。」」と言うのである。フレデリックの気持ちは、光と色、言葉を伝えることにより大きく変化した。

稲葉 (2018) が、「主人公たちは一人での行動を取りながら人生を「詩的に」、前向きに捉えている。」(p.232) と述べているように、スイミーもフレデリックも、一人の時にじっくりと見ることや考えることで、苦しい状況から脱し、生きる喜びを見出したと言える。一人になる経験が重要であり、それが変化の契機となったことを捉えることができる。

どちらの人物も苦しい状況を乗り越え、最後には自分の特性とリーダー性を発揮することができるようになるのである。2冊の絵本の文と絵に着目して比較し、共通点を見つけることで小さな者の心の成長、飛躍を読み取ることができる。

③ 最初の場面と最後の場面の違いの比較

『スイミー』の初めの見開きのページは、「ちいさなさかなのきょうだいたちが、たのしくくらすしてた。」の文と、赤い魚たちとスイミーが自由に泳いでいる絵で表されている。最後の見開きでは、スイミーが目になって赤い魚たちと一匹の大きな魚にな

り、「あさのつめたいみずのなかを、ひるのかがやくひかりのなかを、みんなはおよぎ、おおきなさかなをおいだした。」と書かれている。それと共にスイミーたちが団結して作った魚と、逃げていく2匹の魚の絵が描かれている。3匹の魚は、裁ち切り(端の絵がカットされている)の手法で描かれることで、共に大きな魚であることが想像される。最初の場面では自由に泳ぎ回る楽しさはあるが危険が伴い、最後の場面では、それぞれの自由はないが、恐ろしい大きな魚に襲われることなく安心して海の中を泳ぐ楽しさがある。

一方『フレデリック』の最初の見開きでは、フレデリックだけが反対を向いている。他ののねずみたちの進行方向とは逆であり、そこからはマイナスイメージをもつ。しかし、最後の場面で、フレデリックは真ん中に描かれた岩の上に正面を向いて頬を赤くして立ち、「そういうわけさ。」と照れる。

これら2冊の絵本の文と絵に着目して比較しまとめると、最後は共に協力したり認め合ったりする集団へと高まったことを読み取ることができる。

④ 人物の役割の比較

スイミーもフレデリックも集団の中で問題の解決方法を考え、仲間に伝え貢献する。真っ黒のスイミーが、赤い魚の仲間と共に大きな魚を形作る場面では、赤い魚たちに決して離れ離れにならないこととみんなが持ち場を守ることを教えたことが書かれている。スイミーの気持ちは直接書かれていないが、見開きの絵に着目すると、長い時間をかけ根気よく仲間を一つにまとめる役割を果たしたことが分かる。

フレデリックはのねずみたちの心の中を温かくし、詩を披露し、拍手喝采を浴びた。スイミーのように進んで働きかけたのではなく、のねずみたちに尋ねられて自分の想像した世界を伝えていくのだが、スイミーと同様に自分の特性で集団を救うという役割を果たすのである。

松岡 (2013) はスイミーもフレデリックも「レオ自身が投影されている」(p.152) とし、芸術家としての役割を果たしていると説明している。2冊の絵本から教えられるのは、人とは異なるものの見方や考え方で自分の力を発揮する素晴らしさである。

児童は、一般的に『スイミー』で協力・団結の素晴らしさについては容易に読み取ることができるが、『フレデリック』との比べ読みにおいて役割に着目して共通点を見付けるといふ思考方法を用いる

ことで、集団のために個性・特性を生かして伝える役割が強調される。

⑤ 詩的表現の比較

比較しながら文章表現のよさに着目することもできる。『スイミー』では、生き物たちの様子が比喻を用いて表現されている。その表現により、生き物の色や形、大きさ、動き等についてイメージを広げることが可能になる。『フレデリック』においては、光や色や言葉を集めるという想像の場面設定がされ、最後に詩が作られる。どちらの作品も夢や希望が感じられる表現である。

2冊の絵本の表現に着目し、比較することで、全く同じ表現法ではないが、場面の様子や人物像を具体的に想像するために効果的な表現法であることを捉えることができる。

⑥ 絵の表現の比較

『スイミー』では、海の大自然の中の小さなスイミーを強調するように、絵の余白が広がっている。『フレデリック』では、大きな岩に対して小さなのねずみが描かれている。余白はほとんどが白である。

二つの作品の共通点は、大自然の中に住む小さな登場人物である。文章と共に絵を読むことで、小さな存在が強調され、小さいにも拘らず重要な役割を果たす生き方をすることを読み取るとともに、児童自身も集団の中でどのように過ごしていくことができるのか考え、希望をもつことが期待できる。

次の(2)から(6)は、『スイミー』を読む時とその読み方を『フレデリック』で生かす時に用いる思考方法である。これは思考力・判断力・表現力の育成につながり、深い学びを生むことができると考える。

(2) 関連付ける方法

① 場面と場面との関連付け

『スイミー』の「こわかった、さびしかった、とてもかなしかった。」「だんだんげんきをとりもどした。」という文とスイミーの絵(位置や表情)を関連付けて読んでいくと、想像を広げてスイミーの様子や気持ちを読み取ることができる。さらに、「怖く寂しい思いをしたスイミーなのに、なぜ勇気を出すことができたのだろう。」という発問や「スイミーは、なぜみんなと大きな魚になることと、自分が目になることを考えられたのだろう。」等の発

問をすると、前の場面と関連付け、個性ある生き物たちに出会うことで新しい世界を発見し、新しい願いが生まれたことを読み取ることができる。

『フレデリック』では、フレデリックの気持ちを表す言葉や文は直接書かれていないが、『スイミー』と同様に、フレデリックの様子や気持ちを絵から読み取することもできる。のねずみたちが働いているとき、フレデリックだけがページの進行方向と逆の左向きで、まぶたは半分閉じた状態である。光を集めている時もフレデリックだけが反対向きで黙想している。色を集めている時は、フレデリックだけが後ろ向きである。言葉を集めているときは、「ねむってるみたい」と書かれているように、反対向きでまぶたは半分閉じた状態である。しかし、のねずみがフレデリックに、集めたものを尋ねるとフレデリックは、初めて右向きになり、答える時に、他ののねずみたちよりも高い位置に立つようになり、目がぱっちり開く。最後には、中央の高い位置に正面を向いて立つフレデリックが描かれている。このように絵の位置関係に着目すると、「フレデリックは、ずっと反対や後ろを向いていたのに、なぜ最後には正面を向くことができたのだろう。」という発問が考えられる。この発問をすると、前の場面と関連付け、得意なことを伝えることで自分の役割を自覚したことを読み取れると考える。

このように、『スイミー』において文と絵に着目し、前の場面と関連付ける読み方を習得すると、『フレデリック』においても同様の読み方ができるようになり、思考力・判断力・表現力に結び付くと考えられる。

② 自分との関連付け

『解説国語編』で示されているように、感想をもつ際には、自分と関連付ける方法が取り入れられる。

例えば、スイミーが独りぼっちになった場面で、「もし自分だったらどうするだろう。」という発問をすると、恐怖感でいっぱいだったスイミーに共感した上で、次の場面で勇気を出すスイミーの大きな変化を読み取れる。『フレデリック』では、「フレデリックのような友達がいたらどうしますか。」という発問により、友達との関わり方について考えることができる。

単元の最後には、「自分だったら、スイミーとフレデリックのどちらと親友になりたいですか。それはどうしてですか。」または、「自分は、スイミー

とフレデリックのどちらになりたいですか。それはどうしてですか。」などの発問で人物をより身近に感じ、自分の問題として考えることができる。児童にとって人物が生き方のモデルとなり、日常生活に結び付くことは、人間性の涵養につながると考える。

このように関連付けて読む方法は、他の絵本を読む際にも容易に活用されると考えられる。

(3) 順序付ける方法

『解説国語編』の第1学年及び第2学年の重点的な目標は、順序を考えることであるが、ここでは、順序を理解するだけでなく、その意味にまで迫ってみたい。

レオ＝レオニが見開き15ページのうち6ページを生き物との出会いの絵にしているのは、それらの場面を重視しているからだと考えられる。そうであるならば、スイミーが生き物に出会う順序には意味があるはずである。

1番目に出会ったのは、透明感があり、美しい色をしたくらげである。スイミーにとっては大きい、決して怖いものではなく、柔らかいイメージをもった静的なものである。大きな魚に仲間を飲み込まれた後に同様の怖い生き物に出会ったならば決して気持ちの変化は起こらない。2番目に水中ブルドーザーみたいないせえびに出会う。確かに強そうなはさみをもっているが、スイミーは大きなくらげに慣れてきたため、はさみの形や動きに興味をもったと考えられる。3番目に見る複数(3匹)の魚たちは、それぞれ色が異なるが、一緒に同じ方向に泳いでおり、スイミーは引かれていく。4番目に出会うこんぶやわかめの林は、それまでよりも数が増えている。5番目には、1匹だが驚くほど長いうなぎに出会う。最後は、動きのある複数のいそぎんちゃくに出会う。

このように、静的なものから動的なもの、単数から複数のものという順序で生き物は登場していると考えられる。子どもたちに一読させた後、それぞれの生き物を絵カードにしたものを渡し、順序良く並べさせ、その理由を話し合うことで生き物の様子を具体的に想像させることもできると考える。

フレデリックは、1番目に光、2番目に色、3番目に言葉を心の中に集め、その順序でのねずみたちに伝えた。まず光により、みんなを温かい気持ちにさせ、次に色により自然を想像させ、4匹ののねずみと重ねた詩を読むことで四季の移り変わりを思い出

させるようにしていると考えられる。フレデリックは、のねずみたちが想像しやすい順序で伝えているのではないだろうか。

このように、『スイミー』で習得した、順序付ける思考方法を用いた読み方は、『フレデリック』においても活用することができ、順序にも意味があることを理解することができる。

(4) 多角的に見る・多面的に見る方法

低学年の場合、直接、主題という言葉を出して指導することは困難だが、複数の相手と場面を例示し、発問を工夫することで絵本が伝えている大事なことを自分なりに捉えられると考える。例えば、「人物にどんな言葉を言ってあげますか。」という発問に対する答えの中には人物像や主題と類似したものが表されると予想される。

『スイミー』では、言葉をかける相手をスイミーと仲間たちに分けて考えることができる。例えば、仲間たちに言葉をかけさせるときは、大きな魚を作るところ、作ったところで考えさせることができる。また、スイミーに言葉をかけさせるときは、いろいろな生き物たちに出会う場面、考える場面、みんなに教えた場面、目になることを決心し、伝えた場面、みんなと一緒に泳ぐ場面等について考えさせることができる。このように複数の場面を示すことで、多様な考え方が出てくる可能性がある。

『フレデリック』においても同様に、場面を設定し、ねずみたち、フレデリックへ言葉をかけさせると、多様な考えが出てくる可能性がある。

『フレデリック』について読み取った後には、『スイミー』との共通点や相違点も明らかになってくる。共通点は、作者であるレオ＝レオニの考え方が表れたものとして捉えることができる。

共通点は以下のように考えられる。

- ・自分たちとは異なる者のよさを受け入れる素直さや寛容さ(『スイミー』:赤い魚たちは、スイミーの言うことを聞き入れ、共に大きな魚になる練習をする。『フレデリック』:のねずみたちは、フレデリックの集めたものを素直に聞き、最後にフレデリックを詩人として認める。)
- ・想像する力のすごさ(『スイミー』:スイミーは生き物たちの出会いによって大きな魚になることを思いつく。『フレデリック』:フレデリックは、冬を迎えるために物の準備ではなく、心を豊

かにする準備をする。)

- ・ 仲間に働きかけることにより、問題を解決する。リーダーとしての役割を果たす。みんなの命を守るために貢献する。
(『スイミー』：スイミーは、見つけた新しい仲間と遊ぼうと誘う。大きな魚になることを提案し、教える。『フレデリック』：フレデリックはのねずみたちに光と色と言葉を伝える。)
- ・ 自分の個性を生かす素晴らしさ
(『スイミー』：真っ黒なスイミーは、大きな魚の目になる。『フレデリック』：フレデリックは詩によってのねずみたちに想像する楽しさと生きる喜びを与える。)

(5) 見通す方法

低学年の児童がこの方法を使うためには、物語の続き話を考えさせるとよいと考える。

『スイミー』では、次のような発問をすることで、話の続きを想像することができる。と考える。

○これからもスイミーたちはずっと一緒に泳ぐのでしょうか。どうしてそう思いますか。

前述した比較の思考方法を用いると、児童は最初の楽しい場面と最後のみんながまとまって泳ぐ平和な場面の違いを明確に捉え、一つになることの素晴らしさを感じることができる。一方で、児童には、現実問題として、団結とともに一人一人の自由の大切さについても考えさせたい。確かに一匹だけではできないことがあってもみんなが自分の役割を果たし、協力することで大きな力を発揮することができる。しかし、自分の思いをもち、自分のペースで自分らしく行動をすることで伸び伸びと生きていくこともできる。フレデリックのような児童がもし、いつも集団から抜けられなければ、優れた力は生まれなかっただろう。

『フレデリック』では、次の発問が考えられる。

○1年後の冬が来る前に、のねずみたちは、フレデリックにどんなことを言うのだろう。

これは、自分たちと異なる才能をもつフレデリックを認めたのねずみたちがこれからフレデリックにどう関わるかを考えさせる問いである。ここで、のねずみたちの「働く」の意味とフレデリックの「働く」の意味を考えさせることもできる。

物語の続き話を考えることは、自分の見方や考え方を育て、広げることになる。

(6) 抽象化する

低学年の児童がこの思考を使うことができるようにするためには、2冊の絵本の副題(『スイミー』の副題は、「ちいさなかしいさかなのはなし」、『フレデリック』の副題は、「ちょっとかわったのねずみのはなし」)を自分で作り変える活動を取り入れることが考えられる。「自分だったらどんな題をつけるだろう」という発問により、人物像や主題が表れた一文を作ることが期待される。

『スイミー』では、次のような副題が考えられる。

- ・ 友達の力をまとめたさかなのはなし
- ・ 知恵を出して行動したさかなのはなし
- ・ たくましく成長したさかなのはなし
- ・ 自分にしかできないことをやりとげたさかなのはなし

『フレデリック』においては次のような副題が考えられる。

- ・ 詩でみんなを元気にしたのねずみのはなし
- ・ ヒーローになったのねずみのはなし
- ・ みんなを幸せにしたのねずみのはなし
- ・ とくいなことを生かしたのねずみのはなし

このように、絵本の副題を自分なりに作り変えるという活動を設定すると、副題と文章全体とを関連付け、重要なことを一文で短くまとめることが可能になると考える。

5 思考方法を活用した深い学びの姿

絵本『スイミー』と『フレデリック』の教材研究により考案した「深い学びを生み出す読み方の構造化」を図1と図2に示す。

図1は、2冊の絵本を比べ読みする場合である。それぞれの絵本の中で関連付けをした後、複数の観点にそって、文と絵に着目しながら思考方法を活用して2冊の共通点を見付ける。このようにして概念的・高次の読みが可能となり、それが深い学びになる。さらに、他の本でも共通点を自分で見付けることにより、思考力が身に付く。また、自分と関連付けて読んだり、主題を読み取ったりしたことを道徳科の内容と結び付けると、人間性の育成につながる。日常の読書でも同様の読み方を活用することで、読書生活が広がる。これらはすべて深い学びの姿であると考えられる。

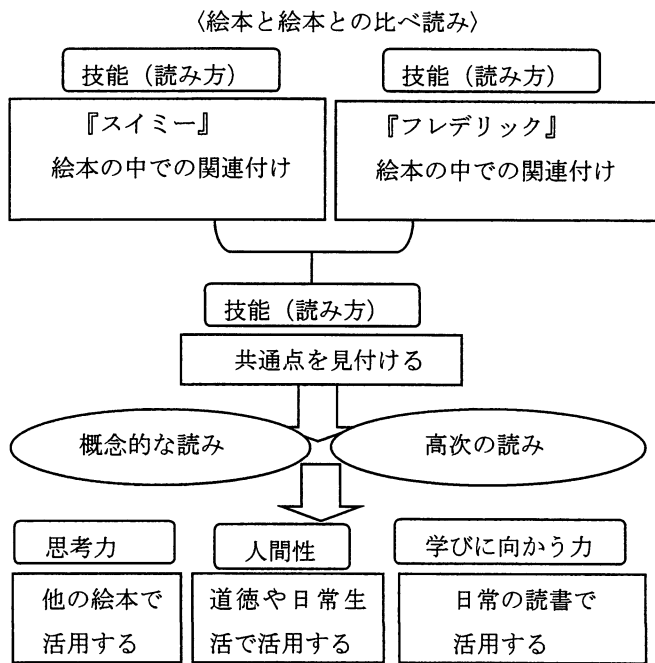


図1 深い学びを生み出す読み方の構造化 (比べ読み)

図2は、まず1冊の絵本の中で多様な思考方法による読み方を習得した後、2冊目の絵本でその読み方を活用する場合である。その後、他の本でも同様の読み方を活用することにより、比べ読みと同様に、思考力や学びに向かう力・人間性等の資質・能力を身に付けていくと考える。

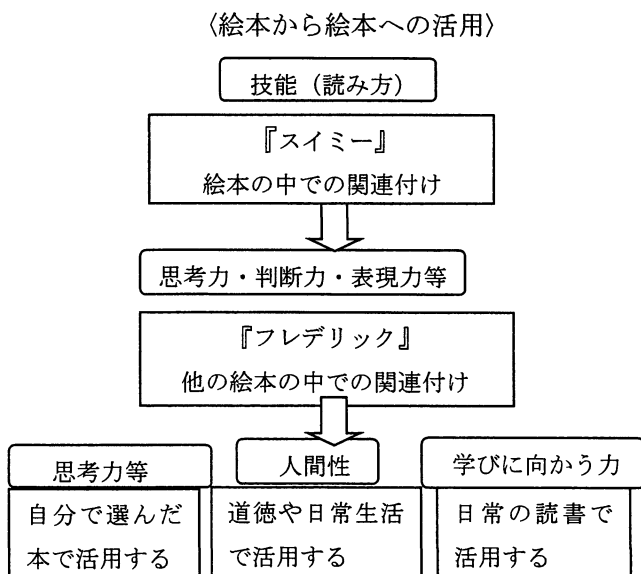


図2 深い学びを生み出す読み方の構造化 (活用)

6 考察

本研究では、教科書教材「スイミー」の単元にお

ける絵本（「スイミー」と同一作者の絵本）の位置づけ方として2通りを示した。1つ目は絵本『スイミー』と絵本『フレデリック』の共通点を見付ける比べ読みである。二つ目は、絵本『スイミー』を学習した後、習得した思考方法を用いた読み方で絵本『フレデリック』を読むことである。

本研究では、『解説総合的な学習の時間編』で例示されている「考えるための技法」を、読むための思考方法として絵本の教材研究を行った。思考方法と身に付く力についての考察は以下の通りである。

- ・比べ読みをし、共通点を見付ける思考方法を行うと、それぞれの絵本内での関連付けが結び付き、1冊では注目しにくいところにも注目することができ、概念的な読み、高次の読みを引き出すことが可能になる。
- ・教材研究では、思考方法の「関連付ける」、「順序付ける」、「多面的に見る・多角的に見る」、「見通す」、「抽象化する」を活用した。その結果、『スイミー』の読み方が『フレデリック』を読む際にも活用された。「関連付ける」の思考方法で読んだ場合、文と絵に着目しながら前の場面と関連付け、人物の気持ちの変化を深く読み取ることができる。「順序付ける」の思考方法では、内容の順序だけでなく、順序の意味も読み取ることが可能である。「多面的に見る・多角的に見る」の思考方法では、多様な主題を引き出すことができる。「見通す」の思考方法では、物語の結末以降を考えることにより人物や集団の在り方に対する価値観を広げることができる。「抽象化」の思考方法では、重要な一文でまとめる力を身に付けられる。

このように2冊の絵本を教科書単元の中に位置付け、多様な思考方法を活用して読むことにより、1冊を読むよりも読みを広げ、深めることが可能になると考える。「深い学び」のためには、指導者が多様な思考方法を理解した上で、絵本をどのように取り入れ、何に着目してどのように関連付けるかを明確にしておく必要がある。

7 今後の課題

「深い学びを生み出す読み方の構造化」(図1・2)は、絵本の『スイミー』と『フレデリック』から考察したものであるため、同一作者の他の絵本や同一テーマの絵本、構成や表現法の異なる絵本を活用す

る場合、見直していく必要のあるものである。

教材研究では多様な思考方法を用いたが、これらの中には互いに関わり合うところもある。今後、他の絵本についても教材研究をすることで思考方法の関わり方について吟味していく。また、小学校教員と共に教材研究を行うことを通して、実践レベルでの単元構成や学習課題、発問を具体化するとともに、授業実践をし、児童の反応（話したこと、書いたこと）から新たな深い読みも実証していく。

【引用・参考文献】

- 青山由紀 (2008) 「「読みの力」を生かして「子ども力」を育てる」筑波大学附属小学校『子ども力を高める授業』図書文化、pp.44-46
- 稲葉昭一 (2010) 「「見ること」の意味—『スイミー試論—』『都留文科大学大学院紀要』第 14 号、pp.81-92
- 稲葉昭一 (2018) 「レオ・レオニの子どもたち—『スイミー』、『フレデリック』、『ペツェッティエーノ』、『コーネリアス』に込めた想い—『英語英文学論集』46 巻、pp.226-239
- 甲斐睦朗ほか四十一名 (2018) 『こくご二上たんぽぽ』光村図書
- 勝見健史 (2014) 『『活用』の授業で鍛える国語学力～単元・本時デザインの具体的方法～』文溪堂 pp.74-76
- 川上弘宜 (2009) 『「比べ読み・重ね読み」で「一人読み」』明治図書、pp.69-76
- 木村松子 (2009) 「教材解釈における「war モデル」と「care モデル」に関する一考察—レオ・レオニ『スイミー』に焦点を当てて—』『学校教育研究』24 巻、pp.126-140
- 小森茂ほか三十七名 (2018) 『あたらしいこくご下』東京書籍
- 滝浪常雄 (2010) 『検証「スイミー」の教材研究—絵本と教科書の^{はざま}間—』『児童教育研究』安田女子大学児童教育学会、19 号、pp.37-41
- 田村学 (2018) 『深い学び』東洋館出版社
- 奈須正裕 (2017) 「座談会」全国国語授業研究会・筑波大学附属小学校国語研究部『国語授業における「深い学び」を考える』東洋館出版社
- 二瓶弘行 (2016) 『最高の「言葉の力」を育む国語科単元づくり』東洋館出版社、pp.22-33
- 浜本純逸・大岡信・野地潤家・新井満ほか四十名 (2018) 『みんなと学ぶ小学校こくご二年上』学校図書
- 細恵子 (2016) 「比べ読みによる児童の感想の分析から指導と評価の可能性へ—『泣いた赤おに』と『お手紙』を対象として—』『国語教育思想研究』第 12 号、pp.15-24
- 細川 太輔 (2014) 「「レオ=レオニびっくり箱」の教材的価値についての一考察—児童が主体的に学習する学習環境デザイン—」『教材学研究』No25、105-112
- 松岡希代子 (2013) 『レオ・レオニ希望の絵本をつくる人』美術出版社
- 文部科学省 (2018) 『小学校学習指導要領 (平成 29 年告示) 解説 国語編』東洋館出版社
- 文部科学省 (2018) 『小学校学習指導要領 (平成 29 年告示) 解説 総合的な学習の時間編』東洋館出版社
- 文部科学省 (2018) 『小学校学習指導要領 (平成 29 年告示) 解説 総則編』東洋館出版社、p.4
- 山本茂喜 (2017) 『思考ツールで国語の「深い学び」』東洋館出版社
- レオ=レオニ 訳 谷川俊太郎 (1969) 『スイミーちいさなかしこいさかなのはなし』好学社
- レオ=レオニ 訳 谷川俊太郎 (1969) 『フレデリック ちよつとかわたったのねずみのはなし』好学社
- レオ・レオニ (1976) 「一九三六年ミラノから」『子どもの館』6 月号、福音館書店